
とある科学と風紀の特異体質

ニシシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学と風紀の特異体質

【Nコード】

N1330R

【作者名】

ニシシ

【あらすじ】

東城時人は学園都市の風紀委員<ジャッジメント>第一七七支部に所属する高校一年である。表向きは無能力者であるが過去の能力実験の後遺症で特異体質になった。そんな彼と禁書目録と超電磁砲の登場人物が織り成す物語です。ヒロインとしては佐天さんでいうとおもいます。基本は禁書目録と超電磁砲のアニメ沿いにオリジナルを混ぜていきます。

読み手の好みがあると思いますが、気に入ってもらえたら感想やア

ドバイスいただけたらと思います。

第0話　主人公紹介（前書き）

はじめまして。本小説を読んで頂きありがとうございます。
本編の前に主人公の紹介をします。

第0話／主人公紹介

東城 時人 <とうじょう ときと>

概要 本小説の主人公。当麻と同じ高校のクラスメイトであり寮も同じである。土御門や青髪とも一緒にいることが多い。補習組の一員だが風紀委員のため免除されている。性格はお人好しで世話好きであり、滅多な事では怒らない。料理や家事、戦闘や情報処理、はては雑務なども幅広くこなす万能スキルをもつ。不良程度なら軽くあしらえる。中学になってから風紀委員になったが、今の支部に移ったのはごく最近である。黒子や初春、固法とはある程度見知っているが、本編開始直後は佐天や御坂とはまだ知り合っていない。戦闘では後述の能力（体質？）と体術と常に持ち歩いている刀で行う。

キャラクターイメージは夜桜四重奏の比泉 秋名のお役目モードです。（知らない方はネットで検索してみてください）

過去 とある実験施設で生まれた試験管ベイビーの為、親はいない。その施設も実験中の事故で崩壊し時人のみが生き残った。その際に特異体質になる。その後病院で小萌に出会い引き取られる。なので小萌には頭が上がらない。家事スキルもこの時取得。中学のときに風紀委員に志願し、高校に入学の際に教師と生徒と一緒に暮らしているのはまずいと学生寮へ移る。この時当麻や土御門と知り合う。常に持ち歩いている刀もその施設から発見された形見の様な物である。

能力 表向きは無能力者。 任意で発動しない限り構造は普通の学生とさほど変らない為能力査定を受けてもなにも反応しない。

特異体質 実験の後遺症で発祥した力。任意による感覚や運動力、傷の治癒力が爆発的に上がる。素手でコンクリートを砕く、かすり傷程度なら一瞬で完治する。至近距離でも銃弾を避ける等。しかし身体にかかる負担が大きく長時間の使用や連続の使用をすると逆に身体にすべてかえってくる。使用中は左目が青くなる。使用後はしばらく左目は見えなくなり、使いすぎると目から血が流れる。

武器 刀 名を時雨くしぐれ>鐔も鞘も真つ白の刀。イメージはゾロの和道一文字。時人がいた施設で見された刀。何故その施設にあったのか誰の所有物なのか不明の為唯一の生き残りの時人に渡された。能力を斬る事が出来る。幻想殺しの刀版。能力者が触れると能力が使えなくなる。普通に刀としても扱えるが時人は大体が峰打ちで使用している。いくらジャツジメントといえ銃刀法違反になる為普段は専用のショルダーケースに入れ持ち歩いている。

第1話〜出会い〜（前書き）

いよいよ本編開始です。今回はタイトル通り主人公と佐天の出会いです。

感想やアドバイスあればお待ちしております。

第1話　出会い

ある日もう日付が変わろうとしている時間に少年は自宅へと急いでいた。少年、東城　時人<とうじよう　ときと>は学園都市の治安を維持するための組織風紀委員<ジャツジメント>に所属している高一である。今日は風紀委員の仕事で遅くまで支部に残っていたのである。

東城「やばい。やばい。まさかここまで時間かかるとは思わなかったよ。当麻には悪い事したな。」

当麻とは彼の住んでいる学生寮のお隣さんであり、高校のクラスメイトである親友である。今日は当麻と当麻の部屋に居候しているインデックスに晩御飯を振舞うつもりだったのができなかった。当麻には電話で話したがその後ろでインデックスが騒いでいたのが聞こえた。かなり楽しみにしていたのだろう。

東城「近いうちに埋め合わせしなきゃいかな〜。ん？」

不意に声が聞こえたような気がした。あたりを見たが特に誰も見当たらなかった。こんな時間に人がいるはずがない。ましてやこの道は普段はあまり使わない道であり不良のたまり場にもなっている場所だ。東城は立ち止まり短く息をはいた。

東城「ふう。感知エリア拡大。．．．．．見つけた。これは．．．悲鳴？」

わずかに聞き取った声は悲鳴だった。東城は急いでその場所に向かった。

そこにはいかにも不良な男が少女を壁際へ追い詰めていた。男の右手には炎が揺らめいていた。おそらく能力者だろう。その奥で少女がその場に座り込んでいた。逃げろと言っても間に合いそうにない。東城はそう判断し、まずは少女をあの手から守らなければ、

東城「解放。脚力レベルを3まで上げる。」

そう呟くと東城は一気に加速し、男と少女の間に割り込んだ。男は驚いた顔をしていた。

男「なっ誰だお前、いつの間に？」

東城「風紀委員だよ。あんた、こんなところで何やってんですか？」

東城は風紀委員の腕章を指した。男は少し驚いたがニヤリと笑い右手に炎を構えた。

男「ハハハッ。丁度いいや。風紀委員にはいつも邪魔されていたかな。見たところ一人みたいだし、二人まとめて焼いてやるよ。」

男は炎を投げようとしたがそこには東城の姿はなかった。そして腹に衝撃がはしり、その場に膝をついた。

東城「ふう。遅いね。隙だらけだよ。」

東城は脚力強化で間合いを詰め、男の腹に肘打ちをしていた。男はそのまま気絶した。

東城「まったく。能力に頼りすぎだよ。さて支部に連絡するか。と
その前に」

東城は先程から震えている少女へと歩み寄った。「大丈夫かい？」
と声はかけてみるがまだ助かった事に実感がないのか未だに震えて
いた。あらためて少女を見るといくら暖かい季節とはいえこの時間
は冷える。なのに少女は薄手のワンピースのみだった。東城は自分
の上着を少女にかけてあげた。すると、少女は顔あげて東城を見た。
瞳には涙をためていた。東城はあらためて「もう大丈夫だよ。」声
をかけると、少女は東城の胸に飛び込んで泣き始めた。東城は少女
の頭をポンポンと撫でた。

少女「すみません。なんか取り乱したちゃって」

少女は恥ずかしいのか俯きながらいった。あれから連絡した支部の
人に男を引き渡した。少女は東城が送っていく事になり、今は少女
が落ち着くのを待っているところだった。

東城「気にする事ないよ。あつ俺は東城。東城 時人だ。見ての通
り風紀委員だ。ちなみに高一。君は？」

少女「佐天。佐天 涙子です。柵川中学の一年です。」

東城「佐天か。よし佐天、家まで送るよ。場所教えてくる？」

「お願いします。」と佐天は答え携帯を取り出したが、そこで佐天
の動きが固まった。

東城「ん？どうかした？」

佐天「もっ門限すぎてる。」

東城「・・・マジで？」

佐天「どうしよう。初春はもう寝てるだろうし、あまり手持ち持っていないし、どうしよう。」

慌てる佐天を見て、東城もどうしようかと考えなんとなくの案を言ってみた。

東城「ん・・・なあ。良かったら、俺の家行く？」

佐天「えっ！？でも、そんな、悪いですよ。助けてもらったのにそこまでしてもらうのは」

東城「手持ち少ないんだろ？それに女の子一人放っておくのも心配だしさ。もちろん佐天がよければだけど、どうかな？」

佐天は思った。確かにそのほうがいいかもしれない。風紀委員だし助けてくれた。何よりすごく優しくそうな人だと思った。正直あんな思いをして一人で居たくないと思った。

佐天「じゃあ。お言葉に甘えて。お願いしてもいいですか？」

東城「よし。決まりだな。じゃあ、外は冷えるし行きますか。」

と東城が歩きだすとクイツと何かに引っ張られた。「ん？」と思い見ると佐天が申し訳なさそうにシャツの端をつかんでいた。

東城（どうだやなゝまだ中学生だし、そんなにすぐには立ちなおれないよなゝ）

東城は敢えてなにも言わずに佐天の歩く速さにあわせるように歩いた。そして二人は東城の家へと向かった……。これが二人の最初の出会いだった。

第2話〜お泊り〜（前書き）

第2話です。

東城に助けられた佐天は東城の家に泊まる事になった。

感想・アドバイスお待ちしております。

第2話　お泊り

東城「一人暮らしで狭いけど遠慮しないで寛いでね。」

佐天「おっお邪魔します。」

東城は佐天をリビングへ通した。佐天はリビングを見渡した。男の人の部屋なのにスッキリとしており部屋の真ん中のテーブルに多少雑誌や本が置いてあったが、きちんと整頓されていた。

佐天「結構きれいにしてるんですね。男の人の一人暮らしだから散らかっているんだと思ってたんですけど。」

東城「まあ。掃除とかは結構好きだからね。あつ佐天、シャワー浴びておいでよ。身体冷えてるだろ？タオルと着れそうな物用意したから。」

ゴソゴソとクローゼットを漁りそして東城は佐天にタオルと着替えを渡した。

佐天「わっ悪いですよ。東城さん先にはいつてください。」

東城「遠慮しなくていいよ。俺は後でいいからさ。薄着で長い時間外にいたから冷えただろ？早く温まっておいでよ。」

佐天「すみません。じゃあ、お言葉に甘えて・・・お借りしますね。」

佐天は東城からタオルと着替えを受け取るとバスルームへと向かった。

東城「さてと、そういや晩御飯まだだったな。今日は簡単にチャーハンにするかな。あつ佐天も食べるかな？」

そんなことを呟きつつ東城はキッチンへ向かい準備を始めた。

暫くして佐天がバスルームから出てきた。

佐天「シャワー、ありがとうございます。」

東城「少しは温まったかい？ん。やっぱり少し大きかったかな？」

東城が佐天に渡した着替えは東城のシャツとズボンだったが、佐天には大きすぎたようでシャツの端は佐天の膝上くらいまでであった。ズボンにいたっては履けなかったようだ。湯上りで少し上気した佐天に東城は少しドキツとした。

佐天「そうですね。やっぱり少し大きかったです。ズボンは丈が合わないんでお返しします。」

東城「あつああ。そうだね。（やばい。今更だがこれは結構ヤバイ状況ではないか？）」

東城は佐天からズボンを受け取る。その時に身長差から少し上目遣いだしシャツの隙間から僅かに胸元が見えた為、またもやドキツと思わず佐天から目を逸らした。佐天は？という顔をしていたが、次の瞬間「グウ」と可愛らしい音がした。佐天は恥ずかしくなったのは俯いた。それで東城は可笑しくなり、

東城「ははは。丁度晩御飯出来たからさ、食べるだろ？」

佐天はコクンと頷いた。

東城・佐天「頂きます。」

二人は東城の作ったチャーハンを食べていた。

東城「余りもので作ったやつなんだけど、どうかな？」

佐天「普通に美味しいですよ。料理も上手いんですね。」

東城「まあね。前に一緒に住んでいた人があまりにも家事が出来なかったからさ。」

東城はため息をついた。「苦労人なんですね。」と佐天はかえした。それから二人は他愛無い話をし、その時に佐天が「アドレス交換してください。」と言ったのでアドレスを交換した。そんなこんなで時間はもう日付が変わって2時間が過ぎていた。明日は土曜で休みだが、佐天を送らないといけないし、風紀委員の仕事もあるため、寝ることにした。東城はテーブルを片付けそこにお客用の布団を敷いた。

東城「佐天はベット使いなよ。俺が床で寝るからさ。」

佐天「いや、私が床でいいですよ。東城さんがベット使ってください。」

暫く譲り合いをしていたが結局、佐天がベッド、東城が床ということになった。東城が電気を消して二人は布団に入った。東城が目を

閉じようとした時佐天が手を伸ばしてきて、

佐天「あの、寝付くまででいいんで握っててもらっていいですか？
実はまだ少し怖くて・・・」

暗くてよく表情は見えなかったが東城は、佐天の行動を可愛く思い、
佐天の手を握った。

東城「大丈夫だよ。寝るまで繋いでるし、佐天が寝るまで起きてる
から安心していいよ。」

佐天「ありがとうございます。東城さん。」

こうしての出会いの一日が終わった。翌日、東城は佐天を寮へ送り
届けた。寮監には事前に事情を電話で説明しておいたので佐天に罰
がでることはなかった。別れ際に佐天が「今度お礼しますね。あと、
暇な時は連絡ください」と笑顔で言った。東城も「分かったよ」と
言って二人は別れた。そおして、親友の当麻とインデックスに朝食
を用意する為に東城は自宅へと急いだ。

第3話〜レベル5〜（前書き）

第3話です。今回は超電磁砲のアニメ第1話の時間軸です。

第3話〜レベル5〜

佐天との出会いから数日が過ぎ、東城はいつも通りの日々を過ごしていた。佐天ともメールでのやり取りをしていた。今日は補習もなくすぐに支部に顔を出すことにした。

東城「じゃあな、当麻、土御門、青髪。」

上条「おう。時人。頑張れよ。」

土御門「またな。時やん。」

青髪「頑張つてゝな。」

上条たちと別れてからそのまま支部へと向かった。

東城「お疲れ様です。」

固法「あら、お疲れ様。今日は早いね。」

支部の扉を開け挨拶をすると、女性が挨拶を返してきた。固法 美偉くこのり みい>は同じ支部の所属であり、先輩にあたる。能力者であり経験も豊富な為、この支部のリーダー的存在だ。東城をこの支部に引き抜いたのも実は彼女である。

東城「固法先輩。今日は一人ですか？」

固法「ええ。今日は白井さんと初春さんは非番だし、他の人はみんな出払っているから事務所は私と貴方だけよ。」

と固法は端末に向かい書類を整理し始めた。東城は魔法瓶にお湯を入れコーヒの準備をした。

東城「じゃあ。半分は俺がしますよ。書類回してください。」

固法「ありがとう。そうしてもらえると助かるわ。」

そして二人で書類を整理して、終わりに差し掛かったころ固法に連絡が入った。

固法「もしもし、初春さん？・・・そう。状況は？・・・分かったわ。今東城君を向かわせるわ。」

どうやら何かあったらしい。固法と初春のやり取りで大体の状況は把握した東城はすぐに準備した。

固法「一緒に白井さんもいるから、問題はないと思うけど、一般人もいるから念の為よろしくね。」

東城「了解。じゃあ。行つてきます。」

東城が現場に到着したとき、既に事件は粗方片付いていた。どうやら銀行強盗だったようだ。しかし犯人グループは既に取り押さえられていた。取り押さえていたのは、ツインテールの常盤台の制服を着た少女だった。少女の右肩には東城と同じ風紀委員の腕章がついていた。

東城「さすが白井だな。まあレベル4だしな。大抵の能力者なら敵わないしな。」

東城はこれは自分が手伝うことはないなと思い、その場を立ち去ろうとしたが、その時、犯人の一人が子供を人質にしようとしていてそれを少女が必死に止めていた。その少女は佐天だった。男は人質が取れないことを知ると佐天を突き飛ばし、近くの人に乗り込んだ。どうやら轢殺そうとしているようだ。東城は能力を解放しようとした。その時、

御坂「黒子。ここからは私の喧嘩だから、手、出させてもらっわよ。」

東城「誰だ？」

一人の少女が犯人の車の前に歩み寄った。白井と同じ常盤台の制服で見た感じ白井より少し年上っぽかった。犯人はアクセルを吹かした。少女は臆することなくポケットからコインを取り出し指ではじいた。すると、コインはレーザーのごとく犯人の車を吹き飛ばした。犯人グループと俺は啞然としていた。

白井「これが、常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫。御坂 美琴 お姉さまですの。」

犯人・東城「す、すげえ。」

東城「これが、学園都市に8人しかいないレベル5の第三位か。とんでもないな。」

だが、御坂の吹き飛ばした車の部品が佐天へ飛んできていた。それ

に気づいた東城は脚力を強化して佐天を抱えて部品から避けた。その反動で二人は勢いよく草むらに突っ込んだ。

佐天「いったあ。何がおき、って東城さん？」

東城「よお。佐天。危なかったね。怪我はないかい？」

佐天「ありがとうございます……!!」

東城「ん？どうした？つとほつた傷があるぞ。ちょっと待てる。確か絆創膏あったはずだから。」

東城はポシエットから消毒液と絆創膏を取り出し、手当てをはじめた。佐天は東城の顔が近いので恥ずかしくなり、されるがままに固まっていた。暫くして、手当てが終わったとき、佐天を呼ぶ声があった。

初春「佐天さん」

佐天「あつ初春だ。」

初春「佐天さん。大丈夫ですか？あつ東城先輩じゃないですか。」

東城「おう。初春。あら二人は知り合いだったのか。そいや同じ制服だわな」

佐天「はい。初春はクラスメイトですが……っは」

佐天はいまだに東城に抱えられている状態に恥ずかしくなり、さつと東城から離れた。

初春「そういう佐天さんこそ東城先輩と知り合いだったのですか？」

東城「まあ 偶然助けた時に知り合ってね。しかし・・・すごいね彼女」

東城はこちらに気づいて向かってくる御坂と白井を見ながら言った。

東城「学園都市に7人しかいないレベル5・・・その第3位超電磁砲
レールガン
か・・・」

初春「はい。私も今日知り合ったばかりなんですが、すごいですね。」

と御坂と白井が到着した。

白井「初春。負傷者ですの？・・・って東城さんではないですか。」

東城「よう。白井。相変わらずお見事な解決だったな。」

白井「いえ。最後はお姉様がかたづけましたので・・・」

と白井は御坂に抱きつくこうとしていた。それを拳骨で防いだ。白井はその場に倒れこんだ。

御坂「たつくこの変態は・・・っとアンタは？なんか黒子の知り合
いみたいね」

東城「俺は東城だ。白井と同じ支部のジャッジメントだよ」

御坂「へえ」。黒子の先輩か。私は御坂 美琴よ。よろしくね。」

東城「こちらこそ。噂はよく聞いているよ・・・白井からな」

そして事件も解決し支部に報告に行くことにした。その時佐天が東城にお礼をいった。心なしか顔が赤かったので東城は熱でもあるのかと佐天の額に手をあてるとさらに真っ赤になってしまったらしい。

第4話『ゲラヴィトン』(前書き)

お待たせしました。 かなり久々の更新です。

第4話　グラヴィトン

夏休みのある日　時人は公園のベンチで佐天を待っていた。

数日前に佐天からメールが来て「買い物に付き合ってください」と頼まれたのだ。その日は非番で補修もなく何もする事がなかったのだ、たまにはいいかとオツケイして今日にいたる。

時人「おつ　そろそろ時間かな？」

と時計を確認したと同時に入り口の方から佐天がかけてきた。急いできたのか肩で息をしてた。

佐天「はあ。はあ。すみません。少し準備に時間がかっちゃって。おまたせしました。」

時人「いやいや。時間通りだよ。ほいこれでも飲んで一息つきなよ。」

と先ほど自販機で買ったスポーツドリンクを佐天に手渡した。佐天はそれを受け取り飲み干す。っとそこで佐天はある事に気づいた。

佐天「あれ？これって時人さんの飲みかけじゃ・・・これってかつ間接キス！！！！」

時人「ん？どうした。佐天。顔赤いが？」

佐天「いい、いいえ。何でもないです。（気づいてない・・・鈍い）
そ、それより速く行きましょう」

佐天は時人の手を引っ張りながら公園をでた。

時人「ほほ　これがセブンスミストか　でかいな。」

佐天「はい。ここは学園都市で一番大きいデパートですからね。
大抵の物は揃いますよ」

時人「で　今日は何を買いにきたんだ？」

佐天「よくぞ　聞いてくれました。流行の夏物が出たんで見に来たんですよ」

と佐天は目を輝かせながらグツと拳を握りしめた。時人は（女の子はやっぱ買い物が好きなのかね？）と佐天の様子を見ながらそう思った。

それからしばらく二人は店を見て回った。最初は佐天の選んだ服の感想などを聞かれていたが途中から佐天が「時人さんもっと私服持ちましようよ。」ということになり今は佐天の着せ替え人形になっていた。

時人「なあ　佐天これ何時まで続くの？」

佐天「ん　時人さん容姿はいけるんですからもっとお洒落すればいいのに」

時人「服なんて制服と部屋着と仕事着あれば事足りるんだが・・・
」

と時人は反論しようとするのだがいかんせん佐天はかなりマジにな

つてきていて口を挟めないでいた。とそんな時向かいのカートのほうに見知った人物を見つけた。

時人「あれ？当麻じゃないか？なやってんだ？」

当麻「よー。時人。お前こそかいも・・・じゃないな。デートか？」

時人「んなわけあるか。付き添いだよ。付き添い。」

御坂「ちよつと。あんだ。私にこの子押し付けて自分は買い物ですか？」

とそこへ御坂が女の子を連れてかけてきた。なんか無意識に静電気が出てるのは気のせいだろうか？そしてあーだこーだと当麻に文句を言っているときだった。時人の携帯がなった。表示をみると支部からだった。

固法「時人君、緊急事態よ。そのデパートに例のグラヴィトン事件の犯人が潜伏してるって情報がはいつたわ。」

時人「なんですって？ 本当ですか？固法先輩。」

グラヴィトン事件・・・ここ最近多発している事件で最初は小規模の爆発でいたずらだと思われていたが連続発生とその爆発の規模の拡大によってついに負傷者が出たため調査をしていたのだ。が未だに解決の糸口は見つかっていないままだった。

固法「そうなの。しかも犯人の狙いはジャッジメントなのよ。今初春さんが民間人の誘導してるんだけど、加勢して貴方達もはやく避難しなさい。白井さんも向かってるわ。」

時人「了解。となると、犯人は初春さんをまず狙うな・・・まずは初春さんと合流だな。」

当麻「どうした？ 時人？事件か？なんかアナウンスもなってるが・・・」

佐天「・・・」

時人「ああ。そのようだな。とにかく当麻。佐天達を避難させてくれないか？俺は初春さんと合流する。」

当麻「わかった。気をつけろよ」

佐天「時人さん・・・」

時人「悪いな。折角の買い物なのにさ。終わったらね。」

佐天「いえ。気をつけてくださいね」

当麻が三人を連れて避難したのを確認した時人はジャッジメントの腕章をつけ走り出した。

時人「初春さん。状況は？」

初春「あつ時人さん。はい一般人の避難は済みました。あとは犯人を待つだけです。」

とその時女の子が何か抱えて走ってきた。

時人「あれ？あの子はさっき当麻と避難したはずじゃ……はぐれたのか？」

当麻「おゝい。時人。さっきの子見なかったか？」

御坂「ちよつと。待ちなさいってば」

丁度 当麻と御坂がかえってきた。さっき避難してたはずだが女の子を探しにきたんだろう。二人も女の子をみて安心したようだった。女の子「おねーちゃんこれ。なんか変なおにーちゃんがジャッジメントの人に渡してくらつて」

と女の子が抱えている物を初春が受け取るうとした時。妙な違和感が時人をよぎった。

時人「初春！！それを遠くへ投げろ！！」

初春「へっつ！？」

と女の子のもっている物がグニャッと歪んだ。初春はそれを払いのけると同時に女の子を抱えた。

御坂「くつつ。ならこれで……」

御坂がポケットからコインを取り出すがあせったのか取りこぼしてしまった。

時人「解放。身体強度最大限に……っこの近距離で耐えられるか？」

時人も能力を解放して初春たちの前に割り込んだがこの距離で耐えられるか分からなかった。そこへ当麻が割ってはいってきた……

爆音とともにフロア中が炎と煙に包まれた。ガラスが道路に飛び散り人々の悲鳴が響いた。

そんな中、少し離れた路地裏から一人の男がその様子をみていた。

男「ふふふ。騒いでる。騒いでる。思い知ったかジャッジメントめ！！」

御坂「それはどうでしょうね？」

男「なっなんだお前は？」

急に声をかけられてびっくりした男はとっさに退いた。

御坂「アンタが犯人ね？大人しく捕まりなさい。」

男「ふん。何をいつてるんだ？何を証拠にいつてるんだ？」

と御坂はポケットから携帯を取り出しボタンを押した。そこにはさっきの言葉が入っていた。男はギリッと齒軋りした。

男「っく。お、お前ら能力者に僕の何が分かるっていうんだよ！！能力があるってだけで威張りやがって。それにジャッジメントだっ

て建前だけで全くじゃないか。なにが学園都市の治安維持だ！！！」

と男が言い捨てると同時に御坂が男の顔面を殴った。男はその場に倒れこみ御坂を見上げた

さらに御坂は男の胸倉を掴み

御坂「歯ア食いしばれ、アンタみたいなやつが一番むかつくのよ。自分が一番かわいそうって思ってるやつがね。」

と御坂が拳を振り上げるとその拳を誰かが掴んだ。

時人「御坂。その辺でやめておきな。」

御坂「東城さん。……わかったわ」

そして御坂は戻っていった。時人はそのまま男を見下ろした。男は東城をにらみつけた。特にジャツジメントの腕章を。

男「ふん。建前だけの組織のくせに。守るべき民間人に大事件起こさせやがつつ。」

最後まで言い切る前に男は何か悪寒を感じた。

時人「……なあ。あまり余計なこと口にださないほうがいいぞ？ 犯罪者のお前にジャツジメントをとにかくいわれる筋合いはないからな。ここで消えるか？」

男「……………」

こうしてこの事件は解決した。が時人は後日買い物が中途半端だっ

た佐天に再び呼び出され買い物につき合わされおまけに食事を奢られるという事になったのだった。

第5話〜御見舞い〜（前書き）

お久しぶりです。仕事が激務だったため今更ですが更新します。

今回は初春さんが風邪を引いた回の後日談で風邪が佐天さんに移ってしまい主人公がお世話をするというよくありがちな展開のオリジナルです。

第5話　御見舞い

夏の暑い日が続く中時人は今佐天の下宿先の部屋の前にいた……。それはつい数時間前の出来事だった。

時人「え？佐天の看病をしにいつてほしい？」

初春「はい。実は先日の私の風邪が移ってしまったらしく、今度は私が看病しようとしたんですが、今度の会議に必要なデータを今日中に整理しないといけなくなってそれで東城先輩に変わりにいつてらいたいんですが……」

生憎と白井も御坂も今日は巡回と用事があるらしくどうやら代わりがないようだった。それならと時人は固法に聞いてみた。

時人「そんな感じなんですけど固法先輩。俺今日抜けちゃって大丈夫ですか？」

固法「ええ。大丈夫よ。この前のグラヴィトン事件も一応解決はしてるし、私も初春さんと事務所では会議の資料を整理してるから。何かあったら連絡入れるわよ。」

時人「了解です。なら行ってきますわ」

初春「ありがとうございます。佐天さんにはメール入れておくのでお願いします。」

時人「となると、飲み物とか消化に良いものでも買っていくか。」

そして固法と初春に簡単に仕事の引継ぎをし時人は佐天の下宿先へ向かった。

時人はインターホンを鳴らした。少し間をあけて佐天の声がした。普段の元気な声より幾分かテンションの下がった声で出てきた。

佐天「・・・あれ？どうして時人さんが？初春がくるって聞いてたんですけど・・・」

時人「ああ。ちょっと抜け出さない仕事でさ。俺が代役って事だわ。メールはいつてなかったか？」

佐天「あつ。充電するから電源落としてたんだつた・・・すいません・・・」

時人「まあそういうことだ。とりあえず上がって大丈夫か？」

佐天「あ。はい。今開けますね。」

ドアが開くとパジャマ姿の佐天が出てきた。熱が高いのか顔は上気しておりおデコには冷却シートを貼っていた。

パジャマも第二ボタンまで開けていて時人はいつかの記憶（第二話参照）が蘇り一瞬目をそらした。佐天もそれに気づきあわてて後ろを向いてボタンを閉じた。そして時人を部屋へ案内し、ベッドになった。

時人「具合はどう？見たところまだ熱はありそうだが。大丈夫か？」

佐天「・・・そうですね。熱・・・はさっきはかつて38.5度でした・・・」

時人「結構シンドそうだな。っとスポーツドリンク買ってきたんだ。あと消化に良さそうなゼリーとかも、食欲はあるか？」

佐天「ありがとうございます。丁度喉乾いてたんですよ・・・いただきます。」

そして時人は買ってきたスポーツドリンクとゼリーをだし、佐天のおデコの冷却シートも変えてやったりした。ゼリーを食べて冷却シートを変えたおかげか少し楽になった感じのようで横になるとスウ寝息をたたててはじめた。時人は起こさないように気を配りながら持ってきていた宿題やら雑誌やらを読み始めた。それからしばらくして・・・

佐天「・・・時人さん」

時人「起きたのか？ 佐天。気分はどう？」

佐天「はい。だいぶ楽になりました。ありがとうございます。」

時人「そうか。でどうした？喉でもかいわたか？冷蔵庫にストックあるからとってくるか？」

佐天「いえ・・・ちよつと夢をみたんです。」

時人「どんな夢だった？」

佐天「能力が使えるようになった夢でした。それで初春達と一緒にジャッジメントやってみました。もちろん時人さんもいましたよ。なんかすごくいい夢だったな」

どこか遠くを見たような感じで佐天は言った。いくら良くなつてるとわいえまだまだいつもの佐天ではなく弱々しかった。時人は人間病気だとはやはり弱気になるものかと思った。でもあえてそこには触れずに

時人「そうか。佐天はどんな能力を使えたんだ？」

佐天「なんか風を操ってました。それで初春のスカートを捲ったり、犯人を浮かせたりしてました。」

時人「そうか。風力使いの能力か、佐天にはぴったりの能力だな。」

しかし佐天はどこか悲しそうに言った。

佐天「・・・でも夢なんです。目を覚ましたらやっぱり何の能力もないって実感しちゃって・・・」

そう佐天はレベル0。無能力者。白井も御坂も初春もレベルの違いはあれど能力が使える。そして検査ではレベル0の時人も特異体質という異能の力を持っている。が佐天には何もない。普通の女の子。

時人「・・・・・・・・」

時人は何も言えなかった。力を持っている自分がどんなに正論を言っても彼女には慰め程度にしかないから。自分がどういったって彼女の今の現実を変えられないのだから・・・・・・・・時人は自分への苛立ちで顔を顰めた。

佐天「どうして、時人さんがそんな顔してるんですか？・・・・・・・・大丈夫ですよ。分かってますから。自分の現実ってやつを・・・・・・・・私は無能力者だって事は・・・・・・・・時人さんは優しいですね。」

佐天はクスッと笑っていた。しかしいつもの彼女の明るい太陽のようない笑いではなく儚げに本当に儚げに笑っていた。

時人「・・・・・・・・佐天。」

時人は無意識に佐天の手を取り起こして抱きしめていた。自分でも何故こうしたのか分からないがそれでもこうせずにはいられなかった。佐天も一瞬びつくりしていたが抵抗はしなかった。

時人「・・・・・・・・今くらいは我慢しなくていい。言い出せないことあるんだろ？溜まっていたんだろ？今は全部吐き出していいよ。」

時人は佐天を抱きしめる力を少し強めながら言った。

時人「ごめん。今はこれしか・・・・・・・・受け止めることしか・・・・・・・・俺には出来ないから・・・・・・・・」

その言葉を聞いて佐天は体をビクッとさせた。そして次第に震える声から泣き声に変わり時人の背中に腕を回して時人の胸で泣き始め

た。

佐天「ヒック・・・ご・・・めんなさいっ・・・分かっていただけ・・・
分かっていただけ・・・でも・・・憧れは捨てられなくて・・・
ヒック・・・」

時人はそんな佐天の頭を撫でながらあやし続けた。そして暫くして泣きつかれたのか佐天はまた眠りに落ちていた。涙の後で顔は酷いことになってはいるが表情自体はどこか安心したようだった。後日佐天の風邪はすっかり良くなり、初春と共に支部の方へ顔を出した。いつもの元気でニコニコ笑って初春のスカートをまくってりして白井や固法、御坂とじゃれ合っていた。それをデスクで眺めていた時人に気づくと時人の方に寄ってきて

佐天「あの・・・ありがとうございます。色々と。その・・・
何か少し楽になりました。あっ、あの事は皆には内緒にしてもらえますか？何か恥ずかしくて・・・」

とほのかに頬を染めながらお礼を言ってきた。時人はその時の佐天の顔にドキツとしつつ「あっああ。分かった。」とどもりながら応えた。

第6話〜幻想御手・前編〜（前書き）

昨日に続いて更新です今回は前・中・後篇の構成で行こうと思います。

でわ、どうぞ〜

第6話　幻想御手・前編

時人「幻想御手<レベルアップ>ですか？」

固法「ええ。今学園都市で噂になってるみたいなの。以前は都市伝説って扱いで噂程度にはなっていたけど、どうも実物が存在するらしいよ。」

と端末を叩きながら固法は時人に説明していた。今支部は固法と時人の二人だけだった。ついさっきまで白井もいたが巡回に行くために既に出ていつていた。時人は固法から資料をもらい目を通した。

時人「へえ」。手に入れると能力者はレベルが上がりレベル0でも能力を発現できるんですか。それはこの学園都市にいるなら誰でも喉から手が出るほど欲しがる物つすよね」

固法「ええ。でもそれは許されるわけにはいかないわ。能力はそんなに簡単にレベルが上がるものでもましてや身につくものでもない物よ。それをたやすく上げれるとしたら・・・」

時人「まず、間違いなく何らかの副作用がでるでしょうね。使用して直ぐなのか後々なのかは分かりませんが。危険なのは変わらないですね。」

そして固法と時人は険しい顔で腕組みをして唸った。そんな物が今都市内で出回ってるとしたら速く解決しなければいけない。能力の事になるとこの学園都市に住むものならば少なからず惹かれるはずだ。目の前の甘い幻想に。それは後々のその人たちの人生に関わる事だ。風紀委員として何としても止めなければいけない。

時人「俺も情報集めてみます。端末の情報も正確ではな場合もありますし。場合によってはそれっぽい奴らにも接触してみますよ。」

固法「そうね。でも無理はしないでね。もし本当に実在してるなら一筋縄じゃないかもしれないから。」

時人「了解です。」

とガチャと入口のドアが開きそこからいつもの四人娘が現れた。なんだか四人ともげんなりしていた。

固法「おかえり。どしたの？四人ともそんなげんなりした顔して。」

白井「あ．．あの女。あんな公の場所でいきなり脱ぎだしやがって一体どうゆうつもりですの。」

御坂「あ．．暫くあそこのファミレスいけないな．．．制服でバシてるし．．」

初春「アハハハ．．．ですね。」

佐天「私が飲み物こぼさなければ．．．．．」

とそれぞれ苦言を漏らしつつソファーに腰掛けた。時人は「何があったんだか？」と多少心配しつつ幻想御手の情報をまた調べ出した。と初春が時人の端末をのぞき込んでいた。

初春「あれ？東城先輩も興味あるんですか？都市伝説。」

時人「いや。これは調査の情報収集で調べてるんだ。何でも幻想御手っていうのが実在して今出回ってるんだとさ。」

初春「そうなんですか。なら私もお手伝いしますよ。」

白井「まあ。そんなもの実在してるなんて信じがたいですね。」

御坂「そうね。そう簡単にレベルが上がったら私達が普段やっていることが無駄になるわけだし。なんかムカツクわ。」

佐天「……………」

時人は佐天が何かいいたそうな顔をしているのに気づいた。とても難しい顔をして何か我慢しているようだった。

時人「どうかしたか？佐天。何か難しそうな顔してさ。」

佐天「え？い。いえ。何でもないです。それが合ったら私も能力者になれるのかなって。あははは。」

と慌てて佐天は弁解した。時人も「そうか」とその場は何も気に留めず聞き流した。そしてその日は解散し御坂と白井は常盤台の寮へ佐天と初春も同じく下宿先へ帰り。最後に固法と時人が事務所を閉め帰路についた。

時人「なんか今日の佐天は少し様子が変わったな。」

と電話でもして聞いてみようと思ったが、考えすぎかと思い時人は携帯をポケットにしまった。この時は誰も気づかなかった。佐天が幻想御手を入手しておりそれが彼女を危険な事に巻き込む事になると

は

第7話〜幻想御手・中編〜（前書き）

こんにちわ〜 幻想御手の中編です。

第7話　幻想御手・中編

その日時人は幻想御手の情報集をかねて巡回をしていた。しかし、いくつかの情報はあれど決定的な証言になるえる情報は見つからなかった。手帳とにらめっこしながら学区内を歩いていた。

時人「む。これといった情報はないか。分かったのは幻想御手はなんかのアイテムということだけか・・・」

そしてふと時人は先日の佐天の事が気になっていた。あの時彼女は明らかに何かを言いたそうな顔だった。しかしそれを必死で抑えているようにも見えた。あの時は特に何も感じなかったが今更だが気になっていた。携帯を取り出しアドレス帳から佐天の名前を表示させた。

時人「・・・・・・・・どうっすかね。俺の考えすぎでなければいいが・・・」

ピリリリ。と携帯の画面が変わり着信中の画面になった。表示は固法からだった。時人はすぐに反応し電話にでた。

固法「もしもし？時人君。今どこにいるの？」

時人「今セブンスミストの前にはいますが。何かありました？」

固法「ええ。今白井さんから連絡あつてなんか近くの廃ビルの当たりで幻想御手の取引を目撃したそうよ。」

時人「なんですって？本当ですか？犯人は？」

固法「結構苦戦してるらしいわ。あれから通信が切れてるから。時人君すぐに応援に向かってもらえる？座標は今送っておくわ。」

時人「了解です。でわいつてきます。」

固法「お願いね。あとその現場に佐天さんもいたらしいわ。」

時人はそれを聞いた瞬間驚いた。佐天が取引現場にいただって？が今はそれは後回しで白井の応援に向かう方を優先させた。

時人「とりあえず。現場むかいます。でわ。」

と通話終わり急いで現場へ走り出した。送られた座標を確認すると遠くもないが近くもない距離であった。脚力を強化しようと思ったがレベル4の白井が苦戦している相手だ。力は温存しておくべきと判断しそのまま走っていった。

ドゴゴゴッ。現場近くまで走っていた時人は凄まじい音を聞いた。見てみると現場の座標を記していた廃ビルが音を立てて倒壊していた。

時人「マジかよ！？　どんな奴と対峙してんだ白井のやつ。」

そして何回か曲がり角を曲がり目的の廃ビルへ到着した。が廃ビルは既に倒壊した後だった。そしてその近くに犯人と思わしき男をとっ捕まえている白井を見つけた。

時人「大丈夫か？白井。」

白井「あら。東城さん。ええ。このとうり多少手傷は負いましたが、犯人らしき男は捕まえましたわよ。」

と時人は男を見た。如何にもヤンキーと言すべき風貌の男だがその表情は恐怖に震えてた。時人はまさかと思い恐る恐る白井に聞いてみた。

時人「・・・白井。まさか廃ビル崩壊させたのお前か？」

白井「ええ。ビルの柱を窓ガラスで切断してやりましたの。少々厄介な能力だったものですから。」

と得意げに白井は説明した。「これは始末書もんだな」と心の中で時人は思いつつ、当初の目的を思い出したように言った。

時人「っと。それじゃあ。こいつに聞かないとな。幻想御手についてよ。」

白井「そうですね。さあ。洗いざらいしゃべって貰いますわよ？お兄さん」

男「はぐぎつつ。げ、幻想御手は曲なんだよ。」

そういつて男はポケットから音楽プレイヤーを取り出し差し出した。時人はそれを受け取るとボタンを操作したりしてみたが別段変わったところはなく、見た目は本当に只の音楽プレイヤーだった。

時人「で。これをどこで誰から手に入れた？」

男「俺らも色んなツテで手に入れたから元の入手先はわからないんだよ。受け取りもあつちから送り主無名で送られてきたんだしよ。」

どうやら嘘はいってはいないらしい。今まで時人の情報収集ではほとんど進展がなかったため現物を手に入れたことは大きな進歩だった。時人と白井は更に男に質問を使用した時だった……

男「ご苦労様です。ここからは我々アンチスキルが引き受けます。」

時人「アンチスキルか。」

白井「まだまだ。聞きたいことありましたのに……」

アンチスキル「よし。連れて行け。」

そして男はアンチスキルに連行されていった。その際白井は音楽プレイヤーを自分のバックに隠し入れていた。その後時人と白井は支部へ戻り固法と初春を交え幻想御手の現物を調べることにした。

固法「やっぱりどーみても只の音楽プレイヤーね。」

白井「そうですわね。曲を聴いても別段変化はありませんですしね。」

時人「そのようだな。しかし現にあの男は白井と渡り合えるまでに能力を使っていた訳だしな。なんかの手段でもあるのか？」

初春「これはもう少し調べてみたほうが良さそうですね。でもこれがあれば私の能力も……」

と初春は幻想御手を手に取り目をキラキラさせていた。と白井が初春の頭をペシッと小突いた。

白井「おやめなさいな。初春。そんなものでレベルが上がったとしても、嬉しくも何ともございませんことよ。ましてやそんなもの自分の力ではありませんのよ。」

初春「わっわかってますよ。ただ思っただけですよ。私だって風紀委員の端くれです。自分から犯罪には手を出しませんよ。」

言ってることは正論であるが手はしっかりと音楽プレイヤーを握り締めているため説得力は皆無だった。

と時人はふと思いついたように言った。

時人「そういえば白井。佐天はどうしたんだ？あの場にいたんだろ？」

白井「佐天さんですか？ええ。あの野蛮人共に絡まれていたので止めに入りましたが、その後は私もあの男とやりあってましたのでその間に避難でもされたのではないですかね？」

時人「そうか。なら問題なさそうだが……」

白井「どうしましたの？東城さん。あら佐天さんが心配でしたの？あらあらまあまあ。」

といきなり白井は顔をニヤニヤしながら時人を見ていた。なんか良くない想像……。もとい妄想でも含ませている顔に見えて時人は怪訝な顔をしていた。と初春が思い出したかのように声をあげた。

初春「そういえば、佐天さん電話にでてくれないんですよ。かけても着信拒否になってしまつてて。」

時人「なんだつて？メールとかは送つてないのか？」

初春「メールも送りましたけど、返事がないんですよ。」

と時人はおもむろに自分の携帯を取り出しアドレスから佐天の名前を表示し電話を掛けてみた。数コールの後にメッセージが流れた。

「「おかけになった番号は現在お客様の都合でおかけすることが出来ません。」」

時人「・・・・俺の方も着信拒否さえてるか」

誰もが不信感を覚えた。時人はあの時佐天が何か言いたそうな顔をしたのを思い出し更に不信感を募らせた。そしておもむろに刀の入ったケースお持つと事務所の出口に向かった。

白井「どちらに行かれますの？」

時人「佐天の下宿先に行くてくる。これは絶対何かあるはずだ。俺だけでなく初春の番号も拒否にしてるってことは俺らに知られたくないことなんだろうし。」

初春「それってまさか・・・・」

固法「そうね。彼女が幻想御手を何らかの形で手に入れてたとしたら・・・・」

と不意に固法の席の端末から着信の音が聞こえた。固法は端末をスピーカー設定にした。画面からはアンチスキルの職員の声がした。

アンチスキル「ジャツジメントの各支部に通達する先ほど拘束した幻想御手の所持者が取り調べ中に意識不明で病院に搬送された。さらに同様の症状の人も多数確認され全員幻想御手と見られる音楽プレイヤーを所持していたとのことだ。以上通達である。全員警戒せよ。」

白井「これは……」

固法「これが幻想御手の後遺症つてやつね。早く解決しないと犠牲者がふえるわよ。」

初春「はっ。佐天さん!!」

時人「そうだ。もし佐天も幻想御手を使っていたとしたら……俺は佐天のところに行ってくる。」

初春「私も行きます!!」

固法「分かったわ。私はここで待機して情報を逐一報告するわ。白井さんは街へ呼び掛け及び警戒と巡回をしてきてちょうだい。」

白井「わかりましたわ。」

そして時人と初春、白井の三人は事務所をで白井は街へ時人と初春は佐天の下宿先へ向かった。途中の道では既に別の風紀委員とアンチスキルの職員が呼びかけをしていたり倒れたりした人を運ぶため

緊急車両が数台行き来していた。

初春「佐天さん……佐天さん……」

時人「心配するな。大丈夫だ。きつとまだ大丈夫だ。」

初春は声が震えていたし時人も冷静を装っているがかなり焦っていた。その時初春の携帯が鳴りだした。二人は立ち止まり待受を見て驚いた。表示された名は「佐天 涙子」だったからだ。

初春「さ、佐天さん。今どこにいるんですか？電話しても拒否されてて、今大変な事に……」

佐天「……うん。知ってる。幻想御手使っちゃった人が倒れてるんでしょ？マコちゃんもアケミも倒れちゃったんだ……。私ももうすぐ倒れちゃうのかな？」

初春「大丈夫です。佐天さんは大丈夫ですよ。」

初春は佐天を必死に宥めていた。時人はそれを横でただ黙って聞いていた。

佐天「ごめんね。初春。能力も使えなくて迷惑かけてばっかです。」

初春「そんな事ないですよ。佐天さんはいつも私を引っ張ってくれたじゃないですか！！ジャッジメントに合格したときも一緒に喜んでくれましたし。能力なんてなくなっただけで佐天さんは私の友達ですから！！」

公衆の面前にも関わらず初春は大声で大粒の涙を流しながら堂々と

そうだった。時人はそれを黙って見届けえた。

初春「たとえ倒れても絶対にお越しておきますよ。東城先輩だって白井さんだって御坂さんだっていますから……だから……だから大丈夫です。グスッグスッ。」

佐天「初春……ありがとう。ねえ、もしかしてそこに時人さんいる？」

初春「はい。東城先輩も佐天さんのことずっとごく心配せてますよ。今かわりますから……」

と初春は時人へ携帯を差し出した正直なにをいたったらいいか時人はわからなかった。それでも初春から携帯を受け取って耳に当てた。

佐天「……時人さん。ごめんなさい。」

時人「何故、謝るんだ？」

佐天「私。やっぱりダメでした。あの時時人さんに抱きしめてもらって少しは楽になったと思ったのに……なのに」

時人「気にするな。正直あの時の俺はかける言葉がなかったんだ。力を持っている俺が何を言っても無駄なんじゃないかと思ってた……でも」

佐天「……なんですか？」

時人「佐天は能力なんてなくなっても十分だ。明るくて元気で初春や

白井達と笑い合ってる姿が一番だ。能力に憧れるのだって別に悪いことじゃない。今回はやり方を間違っただけだ。」

佐天「時人さん。やっぱり時人さんは優しいです。いつも私の事助けてくれて・・・私なんかの為に・・・」

時人「そんな事はない。佐天だからだ。気づけば気にしてた。今回の事にしたってすごく心配になったんだ。だから・・・大丈夫だ。心配するな。またどうか遊びにいこうぜ。」

佐天「・・・ありがとうございます。それじゃあ。任せますね・・・」

バタッと音がして通話が途切れた。どうやら佐天も他の患者と同じように倒れたらしい。携帯を閉じて初春に返すと二人は頷き佐天の元へ向かった。そして部屋でお守りと携帯を握り締めて倒れている佐天と机の上の音楽プレイヤーを発見した。

第8話〜幻想御手・後編〜（前書き）

へんな前書きはほつといて後編です。
りそうです・・・

今回は前回より長文にな

第8話　幻想御手・後編

プープーと機械の音が病室に流れる。下宿先で倒れている佐天を見つけた時人と初春は救急車を呼び佐天を病院へ搬送した。その後支部にも連絡を入れたところだった。

佐天「・・・・・・・・・・・・・・・・」

初春「こうして見るとただ眠っているだけにしか見えませんよね。」

時人「そうだな。だが意識不明のようだな・・・・」

時人と初春は病室を後にして廊下に出た。廊下では次々と幻想御手の症状で運ばれてくる患者が行き交っていて看護師の人が慌ただしく動いていた。

初春「私。これから木山先生の所に行ってきます。脳科学を研究しているって言うてましたし、何か解決法を知ってるかもしれないで。時人さんはどうしますか？」

時人「俺は一旦支部に戻るよ。電話では報告をしたけど固法先輩にもう一度報告してくる。何かあったら連絡頼むわ。」

初春「わかりました。じゃあ。行ってきます。」

そして初春は走っていった。木山先生とは先日初春たちが知り合った科学者で脳科学の研究をしているらしく助力をしてくれるらしい。後脱ぎ女？という都市伝説だという話もされた。すごい人なんだか

よく分かららない人だと時人はその時思った。

時人「……佐天。無事に意識戻るよな。」

ふと時人は佐天の病室を見て思い返していた。会ってからそんなに日はたっていないが佐天はとにかく明るかった。支部で初春や御坂達とジャレたり雑談したり、たまにコーヒー入れてくれたり、一緒にセブンスミストに買い物にも行った。事件には巻き込まれたが見舞いに行ったときにふと彼女の弱い部分を見た。しかし自分には何も出来なくてその時は自分に腹もたった。思えばあの時に何か出来ていればこんな事にはならなかったのでは？とも思っていた。

時人「……つとここで落ち込んでもしようがない。起きてしまったのならそれを解決するしかないじゃないか。よし。戻るか。」

両手でパシツツと頬を叩き時人は病院を後にし支部へと戻っていった。そして支部に戻ると固法、御坂、白井がいてなにやら端末の前にいた。どうした？と思い端末をのぞき込むとそこには木山先生の名前が出ており、そこには脳に干渉して人の脳信号をリンクさせてその人たちの能力の底上げをするという研究の論文も書いてあった。つまり幻想御手の発案者は木山先生だと言う事だった……

時人「これは……まじか？」

固法「ええ。さっき偶然似たような論文を書いてる人物を調べていたら木山 春生に行き着いたのよ……」

白井「思えば。おかしい事だとだけでした。妙に幻想御手について詳しいと思いましたわ。脳科学の研究をなさっているのとあくまでも仮定だの話でつい納得していましたわ。」

御坂「・・・・・・・・・・」

白井「更についさつきから木山先生との連絡も何故か取れなくなっ
てしまってますの・・・」

時人「なんだと？・・・しまった。初春が今木山先生の所に行つて
るぞ。」

固法「そうだったわ・・・しまった。時間的にもう着いてる頃だし
・・・」

白井「まずいですわね。初春はこの情報をまだ知らないですし・・・
」

御坂「ねえ。初春さんの携帯のGPSって感知出来ない？そしたら
場所の特定出来るんじゃない？」

固法「そうね。その手があったわ。」

と固法は早速端末を動かして作業を始めた。そしてしばらくして初
春の携帯のGPSを察知した。どうやら移動中のようなだった。そし
て向かう先へ先回りすることになった。そして事務所を出ようとす
ると御坂は白井に声をかけた。

御坂「黒子。アンタは残ってなさい。この前の怪我、完治してばな
いでしょ？」

白井「えっ？お姉様。知っていたんですか？・・・大丈夫ですわ。
この程度かすり傷ですわ。」

白井はそう言った。しかし不意を着いて御坂が白井の脇腹を触ると白井の身体は電気を帯びたようにビクつとなりその場に崩れ落ちた。御坂「ほら見なさい。何処がかすり傷よ・・・」

白井「しかし。民間人のお姉様にこのような事危険なことに巻き込むの本来いけませんのに・・・」

と白井は食い下がるが、御坂は白井をそつと抱き締めた。

御坂「何言ってるの？アンタは私の可愛い後輩よ。少しは先輩を頼りなさいよ。」

白井「・・・・・・・・・・」

白井はそれで大人しくなった。固法と時人はそれを見てフツと笑った。そして白井は時人をギロツとものすごい形相で睨んだ。

白井「東城さん。くれぐつれもつ、お姉様に傷つけないようにしてくださいね？もしもかすり傷でもつけましたら、体内に異物でも入れてさしあげますから・・・よろしくて？」

時人「ア、アイサー。（木山先生より今の白井の方がヤバそうな気が・・・）」

白井「何か文句でもありませんか？」

時人「はあ。ないっすわ。謹んでお守りさせていただきますよ。」

白井「ならよろしくてよ。」

御坂「うしつ。じゃあ気を取り直して行くわよ!!」

時人「アイサー。んじゃ。行つてきますわ」

そして事務所前にタクシーを呼び先回りポイントを支持し御坂と時人は現場へと向かった。運転手さんには風紀委員の権限を使つて半ば無理やりに現場まで走ってもらふことにした。

御坂「そういえば、東城さんとは初めて一緒に行動するわね。」

時人「そうだな。御坂の隣にはほぼ白井が居るからな。まあ。改めて頼むわ。多分結構な戦闘になると思う。」

御坂「任せなさい。なんたつてレベル5だから……。でも今回はちよつとそのレベルで佐天さんを傷つけちゃったかな……」

時人「……………」

御坂「木山先生とあつた後に佐天さんと少し話をしてね……。その時に言つちやつたんだ。レベルなんて関係ないつてさ。でも今思えば無神経な話だよねつて思つてさ……」

時人「俺も似たような物だ。何も言えなかった……。何かいつても結果佐天を傷つけることにしかないと勝手に思い込んでさ……」

御坂「……。でも だからこそ助けたい。何も出来なかったから。今度は全部知つてゐるから。佐天さんは私の友達だから。」

時人「そうだな。佐天だけじゃない。他の意識不明者の為にも木山先生を止めなきゃな。」

改めて決意したところタクシーは現場の近くに到着し運転手にお礼をいい降リた。既に戦闘は始まっているように見るとアンチスキルの車両と青いスポーツタイプの車との間で戦闘が起こっているようだ。御坂と時人は現場を見て驚いた。アンチスキルの車両は破壊され職員は倒れていた。そしてその先に人が立っていた……木山春生だ。

木山「……意外と対応が早かったな。さすがといったところか・
・」

御坂「初春さんはどこ？無事なんでしょうね？」

木山「ああ。車の中に拘束してるよ。何傷つけてはないから心配するな。全部終わったら解放するさ意識不明の患者も含めてな。元から誰も傷つけるつもりはないんだ。」

時人「そういう問題じゃないでしょうよ。既にここまで被害が出るんだ。今更そんな事言える訳じゃないでしょうが。」

御坂「一体なにが目的なの？これだけの事をして一体何がしたいのよ？」

木山「……説明してる時間がないんだ。結果がそれを証明してくれる。さあどいてくれないか？」

時人「残念だけど。それは出来ない事だね。・・・木山 春生。幻想御手事件の犯人として拘束させてもらう。」

木山「・・・・仕方ない。なら力ずくで行かせてもらう。」

と木山が構えると彼女の周りに風が取り巻きはじめた。そして右手で時人と御坂を指すとその風が二人へ襲いかかってきた。御坂は横に飛んで躲し、時人は刀を鞘から抜くと前方を斬り裂いた。すると風の刃はまるで斬られたように二つの割時人を通過していった。

木山「ほう。面白いものを持っているな。能力を斬る刀か。はじめて見た。」

木山はさほど驚いた様子もなく佇んでいた。そこへ御坂が電撃を放った。しかしそれは土の壁で塞がれた。

御坂「なっ？二重才能<デュアル>!!」

木山「ふん。そんな物より遥かに高度なものだよ。私のは多才才能<マルチスキル>だよ。」

そして木山は道路に手を当てた。すると道路が崩壊し下の方へ崩れ落ちはじめた。御坂は道路の機材にされてる鉄と自分の電撃で磁石の関係にして瓦礫から瓦礫に飛び移って着地した。時人は自身の身体の強度を上げどうにか着地した。木山は風的能力をつかいゆっくりと降りてきた。

木山「ふふ。レベル5といえど色んな能力を一変には相手出来ないだろ。その少年も面白い力を持っているがどうやら身体の強化だけで特に驚異ではなさそうだ。」

それを聞き、御坂は電撃を放ち、時人は脚力強化で一氣に間合いを詰めて懐に入ろうとしたがその前に電撃は土の壁によって防がれ、レポートで時人の攻撃も躲した。そして持っていた瓦礫を適当に投げつけた。その瓦礫が圧縮されたのを見た時人は刀で薙ぎ払ったが全ては薙ぎ払えず咄嗟に身体の硬化を上げ何とか耐えた。

御坂「東城さん！！！ 大丈夫？」

時人「な・・・何とかな。しかし、これは中々骨がいりそうだな・・・」

木山はまだまだ余裕といった感じで立っていた。そしてまた風の刃を作り更に炎と水の球を無数に投げつけてきた。多属性の連続攻撃に御坂と時人は防戦一方だった。御坂は周りの砂鉄で縦を作ったり電撃で消し飛ばしていた。時人は刀で切り裂いていたが如何せん数が多く脚力強化や硬化を強化して防いでいた。が限界だったようでガクつと膝をついた。

時人「つく。限界か・・・ごふつつ」

御坂「東城さん！！だいじょ・・・！！？左目が・・・」

御坂が時人へ駆け寄ると時人の左眼から血が流れていた。時人は気にしていないようだった。どうやら左目は使いものにならなくなっているようだ。

時人「何。心配いらないよ。これは力の後遺症だ。時間はかかるが時期回復するさ。この場を乗り切れ場だが・・・クソッどうやら体にもガタが来てるな・・・」

御坂「……どうにかアイツに直接取り付ければ直接電撃あびせられるのに……」

時人「あれだけの属性の能力を使ってるんだ。そうとう脳に負担がかかってるはずだしな。一発食らわせればどうにかなると思うが……」

木山「……そろそろ。終わらせようか。どうやら少年の方は限界のようだ。何、殺しはしないさ。しばらく入院してもらったくらいに程度にするだけだから……」

と木山がいうと二人の前に複数の瓦礫が現れた。それらが全て圧縮され始めた……

御坂「つく。グラヴィトンとテレポートの連携!？」

時人「っち。御坂。伏せて砂鉄で守りを固める……後は刀で薙ぎ払う。」

そう言つて時人は御坂を伏せさせ刀でできるだけの瓦礫を薙ぎ払つた……凄まじい爆炎が当たりに上がつてキノコ雲も上がったやがて爆炎もはれた……。そこには瓦礫に埋もれた御坂と時人の姿があつた。二人とも意識はないようだ……

木山「……終わつたな。これで邪魔する者はいない。」

木山はそれをつぶやき翻して歩き始めようとした瞬間だった……いきなり御坂が瓦礫から飛び出して木山の体に取り付いた。

御坂「・・・つつかまえて。」

木山「あの爆発の中で何故無事で・・・」

と木山は御坂がいた瓦礫を見て気づいた。瓦礫には違いないがそれはおそらく能力で作りに出された簡易的な防空壕の様なものだった。

木山「そうか・・・周りの瓦礫を磁力で集めて作ったのか・・・」

御坂「ええ。能力の応用ってヤツよ。でもそれだけじゃないわよ。東城さんが出来るだけあの爆弾を切り裂いてくれたからよ。それで何とか耐えられたのよ。」

木山と御坂は倒れている時人を見た。到底動けるような状態ではなかった。

御坂「さあ。喰らいなさい。直接の電撃よ！！！！」

木山「ギヤアアアアアアアアアア」

プスプスと煙が立ち上がり木山はその場に倒れた。終わった。御坂はそう思っで一息着こうとした瞬間だった。突如木山の体が起き上がった。咄嗟に身構えたが明らかに様子が変だった。木山の背後から何か出ているようだった。

木山「・・・つく。脳の処理が・・・制御デキ・・・ナイ・・・」

そして木山はまた倒れた。して背後から何かが飛び出した。ソレは徐々に姿を変えはじめ胎児のような姿になった。更になおも巨大化

していった……

御坂「ナン……なの？ コレ……」

と胎児は御坂に触手で攻撃してきた。御坂は咄嗟に回避し電撃を放った。直撃した。だが見る見るうちに再生していった。そしてしばらくにらみ合った後胎児は巨大化しながらその場を離れていった。

時人「……つく。気絶していたか……」

時人は目を覚ました。爆弾を薙ぎ払ったのまでは覚えているがその後の事はサッパリだった。相変わらず左目は見えず、身体もガタガタと軋んでいるが、動けるくらいには回復しているらしかった。と辺を見渡すとそこに立ちすくむ御坂と木山、更には無事だったのか初春もいて話をしていた。時人は痛む身体を引きずり三人の元へ向かった。三人は東城をみて安堵と驚きの顔をしていた。

御坂「あ。東城さん。もう動いて大丈夫なの？」

木山「驚いた……あれだけ至近距離で受けはずなのにな……」

初春「……でも大丈夫にも見えませんよ……」

時人「まあ。取り敢えず命に別状はない。……で状況はどうなってるんだ？」

時人は御坂達から状況を聞いた。木山からでた胎児の様な物は巨大化しながら移動してるとの事。その場所が原子力発電所ということ。そこで何か起こってしまえば学園都市は崩壊してしまうことだとい

う。それを止めるにはどうするかということだった。

時人「……………つまりはかなりヤバイ状況だったことなんだな。」

御坂「そうね。電撃受けても再生しちゃうし更にデカくなっちゃうし。打つ手ナシってとこね。何かアンチプログラムのものでもあれば……………なんてね。」

木山「……………それだ。」

初春「……………私持ってますよ。木山先生が渡してくれたアンチプログラム。」

御坂・時人「なんだって?!?!」

そして初春はポケットからデータカードを取り出した。どうやらそれの中にアンチプログラムが入ってるようだ。

時人「それをどうやってあの胎児に聴かせるかだが?どうするかね?」

木山「何か大きなスピーカーでもあればいいのだが……………」

御坂「そうだ。原子力発電所の校内スピーカーのシステムをどこからハッキングして流せれば……………」

初春「……………それなら私がやります。アンチスキルの車両に生きている端末があればできると思います。いえ。やってみます。」

時人「決まりだな。なら後はそれまであの胎児を発電所に近づけさ

せなければいいんだな？」

つと時人は立ち上がり刀を捨てると胎児が向かった発電所の方向に歩きだした。御坂は慌てて止めに入った。

御坂「ちょ．．．ちょっと。それは私がやるから。東城さんは休んで．．．」

時人「出来ないな。それは。民間人ましてや女の子一人にそんな事させられるか。それにこれ以上御坂に傷つけたら俺、白井に殺されかねないからさ。」

御坂「．．．分かったわよ。どうなっても知らないからね。」

そして御坂と時人は走り出した。それを初春と木山は見守っていた。木山はクスッと笑い、

木山「．．．．．全く大した子達だよ．．．」

初春「はい！！ 本当にすごい先輩方ですよ。」

胎児は発電所のすぐそこまで来ていた。先に仕掛けたのは御坂だった。発電所の壁に磁力の力を利用して移動し胎児の前に立ちはだかり電撃を放った。そこへ時人が走り込み刀で退治の身体を切り裂いた。がすぐに胎児は再生した。更にさっきよりも巨大化しているようだった。

御坂「ったく。どこの怪獣映画つかつーのよ。」

時人「ゴ。ラもキング。ングもびっくりだな!!」

その後も攻撃を続けるが攻撃は喰らうが直ぐに再生し巨大になるの繰り返しだった。そして胎児の触手に御坂が捕まった。時人は触手を斬ろうとしたがそこで力の反動が来てガクつと崩れ落ちた。

時人「ちい・・・こんな時にかよ・・・動けよ。俺の身体、今動かないや全部終わっちゃうんだよ・・・」

しかし動かない。それもそのはずだ。長時間の使用。回復しきつていない身体での重ねがけとつくに限界は超えていてむしろ動けるのが奇跡なくらいだった・・・とその時何か耳に音が響いた・・・少しキンキンする音だった。御坂は触手を電撃で攻撃した・・・するとさっきまで再生していたのが再生しなくなっていた。

時人「アンチプログラム・・・初春・・・やったのか、御坂。今なら再生はしない。これで終わらせるぞ」

時人は最後の力を振り絞り刀を杖がわりにしながら立ち上がった。御坂も触手から逃れて地面に降りた。そしてポケットからコインを取り出し胎児に狙いを定めた。

御坂「これで。全部終わらせてやるわよ。」

すると胎児から声が聞こえた。よく聞いてみるとグラビトン事件の犯人の男や意識不明の患者の声、そして佐天の声も重なった声だった・・・御坂はその声を聞きながら立ち上がった。

胎児『誰だって能力者になりたかった……』

胎児は触手で攻撃するが砂鉄の刃で全て切り裂く。

御坂「……………ごめんね。気づいてあげられなくて……………」

胎児『しょうがないよね……………私には……………僕には……………何もなくて……………』

更に氷の礫で攻撃するが電撃で全て消し飛んだ。

御坂「うん……………頑張ったかったんだよね……………」

胎児『なんも力がない自分が嫌で……………でも憧れは捨てきれなくて……………』

後がなくなってきた残り触手で攻撃するが更に電撃で消し飛んだ。

御坂「なら……………もう一度頑張ってみよう……………そんなところでクヨクヨしないで……………自分に嘘つかないでさ……………」

御坂はコインを弾き……………放った。超電磁砲の名に相応しい一撃を……………

御坂「もう一度……………!」

凄まじい電撃で胎児の身体はボロボロに焼け出したそしてそこから核と思われる物質が表れた。

御坂「東城さん!! あれが核よ!!」

時人「……………了解。これで最後だ。俺の今の全部の力をこの一刀

に込める・・・」

そして時人は脚力を強化し飛び上がった。目標は目の前の物体のみ。刀の握り締め渾身の力で物体を切り裂いた。まっぶたつに割れた物体は跡形もなく粉々になりやがて当たりの風景と同化して消えていった・・・

第9話〜幻想御手・完〜（前書き）

当初は前・中・後編の構成でしたが、作者のまとめ能力が低いので
もう一本書きまゝす。胎児撃破後からはじまります。これで幻想御
手編完結でゝす。

第9話　幻想御手・完

終わった。御坂の超電磁砲と時人の渾身の一刀により胎児は完全に消し飛んだ。さすがの御坂も能力を使いすぎたのかその場に倒れ込んだ。時人に至っては当に限界を超えすぎている為か何時氣を失ってもおかしくない状態だった。そこへ初春が駆け寄って来た。

初春「御坂さん、東城先輩。大丈夫ですか？」

御坂「初春さん。うん。終わったよ。助かったわ。」

時人「お手柄だな・・・初春・・・ぜえぜえ・・・」

初春「あわわ、東城先輩・・・ボロボロすぎです・・・」

と初春は慌てて携帯を取り出し緊急車両の手配を要請した。すると遠くから車の音がし、一台のタクシーがこちらに向かって来た。そしてタクシーから白井が出てきて御坂を確認するとまず真っ先に時人へのしかかった。時人はゴフッと呻いた。

白井「・・・・・・・・東城さん。覚悟はよろしいですか？遺言とかなら聞いてあげますわよ？」

時人「し、白井、スマン。マジで今重症過ぎて動けなさすぎるんだか・・・・・・・・アバラも何本かイってるからどいてくれると助かるんだが・・・・・・・・」

白井「お姉様にあんな傷をお付けになって何を言いますの？」

御坂「黒子、そのへんにしておきなさいよ。東城さんマジで重症だから。それに私をかばってこんなになったのよ」

白井「……しょうがないですわね。お姉様に免じて許して差し上げますわ。」

時人「……恩にきる……」

そして白井は東城からだいた。そうすると先程とは態度が変わり東城を支え起こした。そしてこれまた先ほどとは口調も変わり東城を気遣っていた。

白井「ご無事で良かったですわ。お二人とも、それと初春もよく解決してくださいましたわね。」

御坂「皆頑張った結果よ。当たり前じゃない。」

初春「はい。私もジャッジメントですから!!」

時人「……まあ。かなりやばかったけどな……これで終いだろっな。」

そして四人は顔を見合わせてクスッと笑いあった。瀕死の重症には違いないが満足感と達成感があった。これで患者も助かるだろう・・

白井「そういえば、報告ですわよ。幻想御手使用者な患者も徐々に意識が戻り初めてますわよ。特にこれといった後遺症もないそうですわよ。」

それを聞いた初春と時人は先程よりも安堵の表情をした。そこへ一度初春の手配した緊急車両が到着し木山はアンチスキルに任せ四人は病院へ向かった。

医師「き、君。本当に大丈夫なのか？普通なら直ぐに集中治療室に入ってもらわないといけないほど重症のはずだよ。歩いてるのだからおかしいくらいなんだぞ！！」

時人「大丈夫ですつて。ここに来る途中の車で応急処置したし、その間に治癒力強化したからある程度は動けますから。」

病院に運ばれるなり医師たちが時人治療のために病室に運ぼうとしたが時人がこれを拒否したため医師達に押さえ込まれていた。どうやら時人には治療を受ける前にどうしてもやりたいことがあるそうだ。御坂達はそれを笑いながら見届け先に行ってるからと時人をほつといて行ってしまった。

時人「頼むよ。先生。アイツの・・・佐天の無事を確認したらちゃんと治療受けるからさ。それまで少し待ってくれよ。」

医師「佐天？もしかして幻想御手の被害者の一人だね。なんだ彼女の知り合いだったのか。なら仕方ないな。その代わり面会が終わったらちゃんと治療を受けるんだぞ。」

時人「解りました。ありがとうございます。」

時人は医師たちにお辞儀をし佐天の病室に向かった。だが病室には誰もおらず上の階から順位探そうと思った時人は屋上へ向かった。そして屋上のドアを開けるとそこには御坂と白井が入口にいて、屋

上の真ん中くらいで初春と佐天がなにやら話をしているところだった。佐天の無事な姿を見た時人はふうっと息をつき白井の隣の壁に寄り掛かった。

白井「あら。東城さん。お医者様たちは振り切ったのですね。」

時人「まあな。佐天の無事を確認したら、治療をうけるって約束だね・・・」

御坂「だらしないわね。もっと鍛えなさいよ。」

時人「鍛えたって無駄だってーの。こればかりはどうやったってな。」

と御坂と白井に愚痴られつつ佐天と初春を見守っていた。空には丁度夕日も始めていてあたりはオレンジ色に染まっていて何とも言えない景色だった。

初春「・・・佐天さん。」

佐天「ごめん。つまらないことで意地はって、初春たちを危険な目に合わせて傷つけちゃって・・・私、能力よりももっと大切な物を失うところだった・・・本当ごめんね。」

初春「そんな事・・・ないですよ。佐天さんは私の大事な友達ですから、これくら平気です。私だってジャッジメントですし。」

佐天「初春・・・そうだ。忘れてた」

と佐天はおもむろに初春のスカートを握り締め・・・そして壮大に

まくり上げた……

佐天「たっだいまゝ。いやゝこれやらないと帰ってきた気がしないわゝ」

初春「さっさささ佐天さん！！！！何するんですかつつ！！病み上がりのくせに。病み上がりのくせに」

そんなじゃれ合う二人を時人、御坂、白井は微笑ましく見守っていた。白井はふと御坂を見ると御坂は何か考えているようだった。

白井「お姉様？どうかしましたか？」

御坂「何でもないわよ……」

白井「今回の事件、彼らのせいだけじゃなく、それに気づいてあげられなかった私たち能力者の責任でもあるんじゃないのかな？」

白井は御坂の声を真似て問いかけてみた。凶星なのか御坂は顔を赤くしてそっぽを向いた。

御坂「ま、真似しないでよ……気持ち悪い……」

白井「お姉様らしい優しさですね。……優しさついでに気づいて欲しいこともありますわ……」

御坂「え？……何」

白井「私のお姉様に対する、あ・い・を・ですの」

御坂「ひいひい！！ 気持ち悪いわよ。くつつくな。黒子。」

御坂は白井の過剰すぎるスキンシップを全力で阻止していた。そして白井は御坂の電撃をくらい痛がっているのか気持ちよく感じてるのかよく分からない・・・果てしなく気持ち悪い顔をしていた。それを時人は眺めていた。するとこちらに気づいたのか佐天と初春が駆け寄って来た。そして佐天は時人の前に来て視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

佐天「・・・時人さん。また・・・助けてもらいましたね。本当に何度も、何度も・・・」

時人「・・・無事で良かったよ。身体張った甲斐があったってもんだな。」

佐天の顔は笑ってはいたが瞳には涙を溜めていた。更にバックの夕日で照らし出されていた。不覚にもその顔を可愛いと思ってしまった時人は照れ隠しで顔を右側へ背けた。その時佐天は時人の眼帯で覆われた左目を見た。どうやらまだ視力はまだ戻っていないらしい。他の箇所も擦り傷や打撲などでまさにボロボロ状態だった。

佐天「本当に・・・こんなになるまで・・・私なんかの為に・・・」

時人「何いつてるんだ？ そうまでして助けたいと思ったからそうしたんだよ。能力とかそんなの関係ない。お前が「佐天 涙子」だから助けたんだ。助ける理由なんてそれだけで十分だろ？」

そして二カッと笑って佐天の頭を撫でた。その言葉を聞いた瞬間佐天は時人の胸に飛び込んだ。背中に手を回した。骨に響くかもし

れない。でもこうしたいと思って考えるよりも先に行動に出ていた。初春、白井、御坂は口をパクパクさせて微動だにせずにいた。当の抱きつかれている時人もかなりマヌケな顔をしていた。その顔をみて更に安心した佐天は時人の頬に小さく唇を当てて直ぐにはなした。

佐天「時人さん・・・本当にありがとうございます。」

時人「・・・・・・・・・・どーいたしました」

佐天の満面の笑と更にバツクの夕日とのコントラストに時人はかなりの衝撃を受け更にそれにより傷口が開きかけ・・・その場で気を失った。その後早急に集中治療室に入れられどうにか一命を取り留めたのはいいが暫く白井達に弄られる事になったのは言うまでもない。佐天は入院中毎日のように見舞いに来てくれ退院まで時人のお世話をしてくれた。白井たちにからかわれながら顔を赤くしながら・・・でも少し嬉しそうにしていたそう。時人はその顔にもドキッとしたのは言うまでもない。こうして幻想御手事件は無事？に解決迎えたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1330r/>

とある科学と風紀の特異体質

2011年11月17日21時16分発行